



TITLE:

清の太宗の即位事情とその君主権 確立

AUTHOR(S):

三田村, 泰助

CITATION:

三田村, 泰助. 清の太宗の即位事情とその君主権確立. 東洋史研究 1941, 6(2): 79-102

ISSUE DATE:

1941-04-05

URL:

<https://doi.org/10.14989/145737>

RIGHT:

東洋史研究

第六卷
第二號

昭和十六年四月發行

清の太宗の即位事情とその君主權確立

三 田 村 泰 助

清の二代太宗が支那風に倣つて建國建元の事を行ふた際に、之も支那風に倣つて太祖實錄の編纂を命じた。處で先代がなくなつた後、次の天子が實錄を編纂する事は制度上からは別におかしくもないが、太宗の場合は單に形式的なものでなくて政略上の意圖が大部含まれて居る様である。その事を示す例をあげると、實錄上呈の記事の中に「太祖皇帝並に上太后孝慈皇后實錄」といふ言葉が出てくる。孝慈皇后は葉赫納喇氏で太宗の生母であるが、この人は元來太祖の正妻ではないので正妻は別にあつて後述の吳喇納喇氏がそれである。今この様に事實を捏造した譯を考へると、太宗が即位すると同時に自分が正系の後繼者である事を示す爲に、特に實錄の上に自分の生母を皇后として太祖の名と併記させた様に思ふ。逆に考へればかういつた事情が因をなして太宗が即位する事から生ずる種々の不都合さを抹殺する爲に、實錄の編纂を命じたとも見られやう。非常策を以て位に即いた天子は屢々帝紀を正す爲に歴史の編纂を行ふが太宗の場合もこの例に漏れないものだと考へる。それで太宗の非常の即位の事情を調べてその史實を明かにし、それからその史實の齎らす史的意義を考へて見たいと思ふ。

清の太祖の繼嗣問題に就いて最初に注意を拂はれたのは内藤博士である。それで便宜上博士の説を次に掲げる。^②
 博士は「太祖實錄に依れば太祖は『國家政治・子孫遺訓・平日皆豫定告誡・臨御不復言及』とあれど其の世嗣に關して何等言及せざりしといふは疑はし。然れども之實は平日豫定せる所、死後に諸子が之を奉行せざりし者なるが如し」と説いて裏面に異常の事情あるを指摘された。續いて博士は太祖實錄にある太福金吳喇納喇氏の遺言太宗實錄の太宗即位の記事、並に朝鮮側史料なる日月錄丙子錄の記事を引かれて「太祖の臨終の時は末子多爾袞を繼嗣となし嫡子の代善をその攝政となすべきを遺言したが、代善は弟皇太極に護る所あつて、遂に太宗が即位した」といふ風に事實の經過を説明された。そしてさうなつた理由としては「蓋し最後に正妻たりし人の生める子が繼嗣たるべき事は蒙古滿洲の風俗なりしならんも諸貝勒の勢力と當時の國情とは幼子を奉じて國主とするに適せざりしかば正妻は殉死を強ひられ、而して繼嗣の問題は新に協議することゝなりしならん」と斷ぜられた。以上博士の説明によつて讀者は事件の概略を承知されたと思ふ。然し博士の説明は少し簡單で私には物足りないので、もう少しつゝこんで問題の核心に觸れて見たいと思ふ。

先づ參考迄に太祖の諸子中この問題に關係ある人物を左に掲げて見る。

福金修甲氏

褚燕

代善

福金 富察氏

莽古爾泰

德格類

孝慈皇后葉嚇納喇氏 皇太極(太宗)

阿濟格

大福金吳喇納喇氏

多爾袞

多鐸

之は内藤博士の作られた表を借りたものである。

扱この問題の解明に當つて先づ考ふべきは相續に關する當時の考へ方である。博士は最後の正妻の末子が相續するは蒙古滿洲の風俗に基いたものではないかと推定されて居る。私は之に對して何等見解を用意して居ないが、太祖ヌルハチ汗の場合は別にこの風習に従つた譯ではない様である。逆に彼は長子が汗位を嗣ぐべきものと考へて居た趣がある。滿文老檔の長子褚燕を監禁した記事の中にその事が見え、「スレクンヅレン汗今より後、子に政をとらせんと考へ、長子に政をとらせる場合彼は幼少より心偏狹にして國を治める程の寛仁の器量なし。さらばといつて弟に政をとらせる場合兄を措いて僭越にも弟に任かす事が如何して出來やうか……とて長子アルガツツメンに政を委ねた」^③とある。これによると長子は豪傑であつたが政をとる程の器量なく却つて弟の代善がその資格者であつたらしい。それにも拘らず太祖が氣に入らぬ長子に政を委ねたのは當時の思想に従つたものでそれは長子相續の思想によつたものと考へ得やう。従つて清初に於ける習慣に末子相續の思想が有力であつたと考へる必要はないと思ふ。それで繼嗣の問題の考察に於ても當時の思想習慣に拘る必要はないやうだ。所で今述べた當の長子褚燕は父ヌルハチ汗に循ついた爲その怒りを招き監禁されたので當然後繼者の資格を失つてしまつた。そしてこの事件を境に長子をして相續させるといふ太祖の意圖も一頓座を來したらしい。といふのは長子褚燕の歿

後順序に従つて次子代善に國政を委ねるといふ事をしなかつたからである。

而してこの前後、太祖の後金國は改革されて國家としての機能を充分に果し得る様な組織が樹立された。それが八旗の制である。これは言ふ迄もなく滿洲の勢力が伸展するにつれて領土人民が増加し、從來の繼ぎ足し式の治め方では到底漚りがつかなかつた爲で、これを一つの組織ある統治形態にする必要を生じたのだ。

それで汗の地位も從來部族の族長位のものであつたが以後國家の元首の意味を負ふに至つた。従つて繼嗣の問題に於いても單に私法的な身分の立場からでなく一應公法的な制度上の立場からも考へなければならぬ。

今八旗の分封の有様を示す記事を次に掲げて、太祖の諸子中の有力者を抉出しやう。

ヌルハチ汗の天命四年頃のものが朝鮮の李民煥の建州聞見錄に著録してあつて、それによると

胡語呼八將爲八高沙。奴酋領二高沙。阿斗於斗總其兵。如中軍之制。貴盈哥亦領二高沙。奢夫羊古總其兵。

餘四高沙曰紅歹是。曰亡古歹。曰豆斗羅古。曰阿末羅古。

とある。高沙は「旗」の滿洲語 *gasa* の音譯で奴酋はヌルハチ、貴盈哥は代善、紅歹是は太宗皇太極、亡古歹は莽古爾泰、豆斗は長子褚英の子杜度、阿末は太祖の弟シユルハチの長子阿敏である。この記事によると八旗の中四旗をヌルハチと代善が二旗宛領し、他はマングールタイ・太宗・アミン・ヅツが夫々一旗を領した事になる。この中ヅツは長子の子で幼少であつたから實際上はヌルハチが後見したであらう。従つて勢力の上からは問題にならない。ヌルハチ汗を除く他の四人は旗の領主なのだから太祖の直系中最も強力な者ばかりである。それでこの四人は天命六年前後に和碩貝勒 *Hosokabeile* といふ官に擧げられ、太祖の在世中は丁度徳川幕府の老中の如く毎月交替で國政に參與した。和碩貝勒は太祖の後金國の官制に於いては量高の地位であり、太祖の諸子中の最信任最

優秀の人物を以て之に配した事が分る。その故にこの和碩貝勒は制度上汗を繼ぐべき地位であるかどうかを考へねばならぬ。

先づ彼等の閱歴聲望等實際に即してのべて見やう。確かに彼等四人は何れも太祖の有力な後繼者と目されて居たし又事實その様でもあつた。^⑦この四人の序列は代善、阿敏、莽古爾泰、皇太極の順でそれ／＼大貝勒、第二貝勒、第三貝勒、第四貝勒と稱された。従つて大貝勒の代善は貫録年長の順から推して矢張り最も有力な後繼者と見做されるであらう。前引建州聞見録に、「曾死之後。則貴盈哥（代善）必代其父」とあるによつて當時の風評が窺へやう。この風評の中にも多分に當時の習慣が長子相續を妥當としたことを裏書きして居るものがあるのではあるまいか。所で風評の通り實現され、ば何等問題は起らなかつたのであるが實際は筋書通り運ばずに代善に對して有力なる競争者が現はれた。聞見録に、ヌルハチ・代善以外にもう一人の名を擧げて居る。それが太宗皇太極である。聞見録の語る所に依れば「紅歹是（皇太極）勇力絶倫。頗有戰功。所領將卒皆精銳」とある。皇太極は太祖の諸子中第一等の武人である事が分らう。同じく聞見録の代善の人物評の中に「胡中皆稱其寬柔。能得衆心云々」とし、「凡得罪於奴酋臨殺。貴盈哥多有救解云々」と記して代善の柔和寛仁の性質を指摘して居る。この様に代善と皇太極とは方に對稱的存在であつた。そして皇太極の存在は薩爾濤戰後俄に認められたらしい。サルホ戰といへば周知の如く明清各々國力を傾けて戰つたのであつて、殊に滿洲側の方は敗れば元も子もなくなるといふ程の超非常時の戰爭なのだから滿洲側の緊張の程も察せられる。この戰で皇太極は大いに男をあげて部衆の賞讃を一身に集めたいらしい。されば皇太極の存在は李民煥の如き外國人の目にも大きく映つたに違ひない。その事は李民煥が他の諸子には一言も言及して居らない事によつても知り得る。かくて汗の後繼者としての皇太極の姿が鮮

かにクローズアップされた。創成期の清朝は尙武の國武人の天下である。皇太極の位置は大概想像されやう。

今彼の部内に於ける勢力を示さう。天命八年ヌルハチ汗が皇太極に諭した言葉が滿文老檔に見える。^⑧その一節に

汝賢明ならば何事にも公平に處し寛弘を體し諸兄弟に一樣に相敬せよ。汝自ら獨善に居り、他を凌ぎ且つ諸兄を措いて汝汗位に即かんとするか。衛門に參集の後、退出するに當つて汝諸兄を送り諸兄の子弟之に酬ひて汝を送らば道に適ふ。汝諸兄を送らずして諸兄の子を送るを汝如何にして默して容るゝや。

とある。この諭旨から察すると皇太極は諸子中壓倒的存在で諸兄に對して弟の禮をとらず、諸子又皇太極に追従しその起居宛然繼嗣たるの行爲であつたと見られる。そこでヌルハチ汗がその傲慢を戒めることになつたのであるが、就中「兄を措いて汗位に即かんとするか」といふ言葉は仲々意味深長である。兎も角も皇太極の威望は内部に於ては牢固たるものがあつた事は争へぬ。

所でこの諭旨は天命八年太祖の薨去の三年前に出て居るのだが、その前年にヌルハチ汗は後繼者に關する勅を下して居る。これは諸子の方から後繼者を誰にするかと伺ひを立てたのに答へたるものである。恐らく息子共はしびれを切らしたのであらう。即ち太祖老檔の天命七年三月三日の條に、

父を受繼いで國に君たるべきは力のある強きものを君となす勿れ。力ある強きもの國に君たる時己れの力を無上となして事に臨み、爲に天に咎められむを恐る。……汝等八王議を一にして事に當れば滅ぶる事なし。

八王汝等の言を退けざる人物を見定め汝等の父に繼ぎて國に主たれ。汝等の言を聽かず善道を行はざれば汝等の任ぜる汗を替へ汝等の言を拒まざる有徳の人物を立てよ。……

とある。これによると衆の選んだものが汗に即く事になつて丁度蒙古のクリとタイに似たものになる。従つて問

題の和碩貝勒は制度として見る時特に汗を嗣ぐべき性質のものではなさうである。それで後繼者は結局人の問題に歸着するが、その點から考へると太祖の眞意が奈邊にあるかは知るに由もない。然し右の言葉によつて皇太極は落第である事は間違ひない。恐らく太祖も後繼者に關してはほと／＼弱つたのであらう。太祖は諸子の實勢力を知つて誰を指名しても波瀾が起きる形勢から、かくはお座なりの衆議制を暗示したものと思へる。然しそれが行はれないであらう事はヌルハチ汗自身が誰よりもよく知つて居た筈である。そして以上の説明によつて制度上繼嗣たるべきを特に規定したもの、例へば支那に於ける皇太子の制といふ様なものは別になかつた事が分る。

さて數百年たつた後から我々が然も異國の老獪な王様の腹の中を探るのは笑止な事で話も漸時講談めいてくるのも仕方がない。所で、次の様な妙な記事が傳つて居る。これは内藤博士も引用されたものだが、繼嗣に關する朝鮮側の風聞が日月錄に載つて居て、それによると「或曰奴兒赤臨死。謂貴永介曰。九王子當立。而年幼。汝可攝位。後傳九王」とある。九王といふのは大福金ウラナ氏の第二子多爾袞ドルゴンである。この記事の通りとすれば太祖の臨終の際このドルゴンを世嗣となし、代善が攝政たるべきを遺言した事になる。怪しいといへば怪しいが然しこの記事は單なる風評として捨て去るべきものでもなさうである。以下その事に就いて話を進めやう。

こゝで先づ大福金ウラナ氏の資格如何といふ事から始める。大福金は滿洲語 *amba tulun* 「「アムバ」は「大」の義に由來する詞」に當るが滿文老檔の記載例から見ればアムバフジンは必ずウラナ氏の事になつて居る。丁度アムバベイレといへば代善の事を指すのと同じである。他の妃は單に「フジン」であつて、例へばモンゴフジンといふ風に呼ばれて居る。これで見ればアムバフジン大福金はさしあたり我が國の「政所」といふ所であらう。そして支那側の皇帝皇后の様に汗に對するアムバフジンといふ風に對概念と見られる。さうして見ると他のフジンは皆側

室といふ譯になる。こゝに考へねばならぬのは正妃とか側妃とかといふ考へには一夫一婦制の思想が基になつて居るので、正妻の子が家を繼ぐといふ考へからすれば正妻の子であるドルゴンが後を嗣ぐのは別に不思議でなくなつてくる。さうすると褚英代善莽古爾泰皇太極は正妻の子でなくなる譯である。そこで滿文太祖實錄には彼等の生母が如何に記されて居るかを見ると

先に娶つたフジン

チュエンダ、ダイシヤン

後添のフジン

マングルタイ、デゲレイ

中のアムバフジン

ホングタイジ

後のアムバフジン

アジゴ、ドルゴン、ドド

とある。漢文實錄には右からの順序で「先娶之后」「繼娶之后」「中宮皇后」「繼立之后」として結局皇太極の母が正妻である事にして居る。然し「中宮皇后」は後の作爲と見ねばならぬ。「中のアムバフジン」といふ語は「中宮」といふ漢語に當てる爲に作つた言葉で傳來の滿洲語ではない。それからウラナラ氏がアムバフジンであるのは分つて居るが、エホナラ氏がアムバフジンで他のドンゴ氏フチャ氏が單なるフジンといふのはおかしい。之は矢張り實錄が帝系を正す爲に編纂されたものだから、そこに身分の差をつける目的で右の様に書いたと見てよからう。して見ると太祖の在世中には女に關する身分といふものは餘りはつきりして居なかつた様である。身分からいへば太祖が丙午の年（萬曆三十四年）始めて汗を稱した時は既にウラナラ氏が正妻であつた筈であるから汗對するアムバフジンはこのウラナラ氏のみが妥當するといへる。然し實際はこの様な嚴密な意味の一夫一婦制が強調された譯ではあるまい。太祖の寵を多く受けたものが一番勢力を得てそれが正妻の如く一般からかしづかれ

アムバフジンと呼ばれたと見てよい様に思ふ。だから繼嗣に關して女の方の資格の問題は考慮せずともよいことになる。

さて寵を受けたといへばこのアムバフジンウラナ氏は大いに太祖のおもひものであつたらしい。益々講談めて恐縮であるが凡てが我國の豐太閤と淀君の如き關係と大差はない。年は三十も違ふし非常な美人であつたといふ事である。そして太祖の寵を擅にした一因はその生子にあつたらしい。それでこの夫人はその寵を恃んで奢侈に耽けり諸將の會議に列つたりして僭越な振舞が多つた。素行も兎角の風評があつて諸王以下苦々しく思つて居た所それが昂じて遂にこのフジンは彈劾され、太祖も彼女を處分すべき運命に陥つた。滿文老檔の天命五年三月の條にそのいきさつが載つて居る。その記事は今迄述べて來た凡ての疑問を一舉に解決する様な内容だと思ふから少し長いが左に引用する事にしやう。

タインチャ(側妃の名)又汗に告げてその事(ダハイと宮女の密通事件)ばかりでなく、又大事の話ありと述べたので何の話かといへばアムバフジンはアムバベイレに二度酒饌を送りアムバベイイン納め喰つた。ヰイチベイイン(皇太極)に一度酒饌を送つたが喰はなかつた。そのみでなくアムバフジンアムバベイレの館に一日二三度人を遣して居るが恐らく謀合はせてかく往來して居るのであらう。妃自らも二三度夜宮廷を抜け出したと告げたのでその話を汗は聞いてアムバベイレヰイチベイレの下にダルハンヒヤ、エルデニバクシ、ヤスン、ムンガツの四人の大臣を遣し糺した所何れも皆事實であつた。汗そこで言を出し「我みまかつた後わが幼子及びアムバフジンをアムバベイレ慈しみ養へよと曾つて申合めてあつた。その言にアムバフジンの心アムバベイレの上に動いたので、何等事もないのに漫然と一日二三度人を遣はしかく往來したのだ」と諭した。汗の館で

諸王大臣が酒宴に集る時も會議に參する時も、アムバフジン金眞珠もて身を飾りアムバベイレを眺め媚態をなすを諸王大臣悟つて學つて非難したが、汗に告げやうにもアムバベイレアムバフジンを恐れ今迄誰も告げずに居た。(以下アムバフジンが汗に隠れて財寶を貯へた事實をのべ) そこで汗大いに怒りアムバフジンの罪惡を衆に告げ「この妃狡猾奸邪盜竊詐欺等人間に備はる醜き心悉くこの者に充滿して居る。わが金眞珠を汝の頭身體堪へられぬ程に飾り、庶民の目に會つて觸れた事もない上等の緞をまとはせ養つた。汗なる夫を慈しますわが目を眩ましわれを捨てわれを措いて他人を訪れ行く時この者を殺さずにおかれやうか。その罪を念じて殺せばわが肝臓にも等しい三人の男子(アジゴ・ドド) 一人の娘をして如何にも泣かせる事であらう。この妃を殺さなければわれを欺いた罪餘りにも大きい」と怨み憤つたが更に言をつぎ「アムバフジンを殺すも詮なし。己のが幼子病を得ば世話し面倒を見よ。この妃と我と居を同じくせず、この妃の與へたもの今は何人も納めてはならぬ。言葉は何人もきいてはならぬ。この命に背いた男女は凡て誅す」と申し渡した。

と見えて居る。讀者にして右の文を充分に讀んで頂けば事件の全貌は明瞭となるであらう。太祖の死後この妃に殉死を強いし事情もうなづけると思ふ。そしてドルゴンを立て代善を攝政となすといふ意圖は確に太祖にはあつたのであつて、日月錄所載の風聞は單なる噂ではない様だ。太祖の肝にも等しい三人の男の子の中ドルゴンはメルゲンダイチンと呼ばれ、その聰明夙に太祖の寵を得たに違ひない。こゝに至つて太祖の場合後繼者は彼の最も寵愛したものがなるといふ事が分つた。然し實際は老檔の記事の通りであつて見ればドルゴンの繼立、代善の攝政は到底實現不可能であつたであらう。この事件の翌年天命六年に和碩貝勒による四頭政治が始つて居る。つまり後の事萬端はこの四人が決めよといふ事であらう。こゝに至つて繼嗣に關する方策は盡きた觀がある。然し大

勢の赴く所は結局皇太極に歸着したであらう事は想像に難くない。だが太祖の情愛尙絶ら難きものがあり危機を
 姘んだまゝ太祖の終焉となつたらしい。そして太祖の歿後果して世繼に關し波瀾があつた様である。明實錄天啓
 六年九月二十八日の條に

奴兒哈赤死於瀋陽。四子與長子爭繼未定。遼東督師王之臣。巡撫袁崇煥以聞。得旨。奴斃已眞。其子爭位。

狡黠叵測。著嚴加防。整兵以待。

と傳つて居る。

太宗實錄によると、太祖の崩後大貝勒代善の二子岳託ヨト薩合廉サヘリヤンは皇太極が深く人心を得、衆の悅服する所である
 から速かに大位を繼がすべき者だといふ事を父に告げた。すると代善も之は我が夙心なりと書をかいて、次の日
 諸貝勒大臣が朝に聚つた時之を示し阿敏・莽古爾泰以下皆喜び議を定めた。太宗は父の遺命なしとて固く辭退し
 たが衆議固く遂に位に即いたとある。恐らく實錄の通りであつたらう。かくて太宗の即位を見たのである。

それと同時に一つの悲劇が発生した。前にも一言した如く有名な大福金ウラナラ氏の殉死事件である。之は後
 に述べる如く重要な意味があると思ふので單なる後日物語としてではなく讀んで頂きたい。太祖實錄によると

太祖英明汗はウラの國のマンタイベイレの娘を繼立の Амバフジンとなしたが容色麗はしく心様惡ろし。汗
 を常に惱ました。かく惡に類き心ではあつたが汗の明に抑へられて事なく濟んだ。太祖汗そのフジンの様を
 見て國に患を残すを恐れ汗の歿後殉ぜしめよと遺言した。諸子この遺言を以てフジンに殉死を強いた所一度
 は拒んだが遂に従つた。フジンは禮装に身を正し諸子に向ひ涙して「我夫に十二歳の時嫁ぎ錦衣玉食二十六
 年われ離れる能はずして従はん。ついでわが二幼子ドルゴン・ドドを撫育せよ」とのべた所、諸子泣いて答

へて「我等二弟を慈しまざる時父の事を忘れたる事とならん。慈しまざる理あらんや」とのべ、アムバフジン自盡した。

とある。老檔の記事を併せ讀む時、部衆のフジンに對する憎惡の念がかく端的な行動をとらせたものゝ様に思へる。別に遺言があつた譯でもあるまい。^⑨唯重要な事は諸子が遺兒を養ふ事を太祖の名の下に誓つた事と、その劇的シーンとである。この事實の重要性は次に述べるとしやう。

二

かくて若き太宗は颯爽として亡き汗の後を襲ふ事になつたが、その汗の地位とは如何なるものであつたか。之に關し内藤博士は「國主の地位は旗民の主と云ふ意義にて支那の如き大一統の旨には合せざりし者の如し」^⑩と説明されて居る。この説明はかなり曖昧であるが、要するに近世支那の君主の如く生殺與奪の權を握る絶對的な獨裁君主の様なものではなかつたと解してよからう。太宗は既述の如く太祖の諸子中第一等の武人であつたからその若武者振りに當時の滿洲國内部の剛快無雙の武人共が惚れ込んで、太宗を推戴して國の棟梁と仰いだのであらう。されば確に「吾等の汗」であつた。何といつても滿洲朝廷は尙武の精神を以て立つ家柄である。然し精神的な名譽と現實とでは又話が違ふ。太宗が汗位に即き實際にその號令を貫徹するには幾つかの大きな障害があつた。彼が平素豫想して居た君主と即位後現實に味ふ君主の地位とでは、そこに大分隔りがある事を知つたに違ひない。

以下彼が如何にして自分の理想の實現に一意専心したかといふ事を説く前に、當時の政治の實際に就いて少しのべて見やう。

先に述べた如く太祖の末年の政治形式は四人の和碩貝勒の交代執政制であつた。太祖の歿後その中の一人が汗位に即いた譯であるが、その事によつてこの政治形式は改變はされたが廢止された譯ではない。即ち太宗が汗位に即くや同時に他の三人代善・阿敏・莽古爾泰は大貝勒に昇格して國政を辦理した。太宗實錄にこの事を記して

先是辛酉年(天命六年)二月太祖曰。四大貝勒直月。國中一切事務。直月貝勒掌握。而寅年(天命十一年)上即位。四大貝勒所直月令。俱令三大貝勒掌握云々。

とある。して見ると事實は太宗の獨裁ではなく太宗とその月番の大貝勒とが協議して國政を執つた事になる。今大貝勒達のこの様な權限を表はす例を挙げれば、太宗即位の年の第一次征鮮に於て大貝勒阿敏が總大將として赴いた。その際軍の進退及び朝鮮との媾和等の事は凡て阿敏の一存に委ねられて居て、太宗はその處置を仰いで來た時にのみ答へる事が實錄に記されて居る。この一例によつても大貝勒の權限の大いさを認め得やう。故に臣下の禮を受ける時は國初にあつては太宗・代善・阿敏・莽古爾泰同坐して群臣に臨んだとある。この様であつて見れば政治の實際は依然として四頭政治と謂はねばならぬ。これは誠に目ざわりな障害であらう。

次に障害の更に大なるものは即ち旗の對立關係に由來するものである。この時分の旗の性質は徳川時代の藩の如きものであり汗と旗との關係は幕府と親藩のそれに似た様なものがある。旗の領主は私兵を貯へ臣下との間には封建社會に見る様な強固な主從關係が精神的にも實際的にも存して居て、その旗の存立の爲には他旗との抗争をも敢て辭せなかつた様である。この事實は次の例に於て略々知り得やう。即ち第一次征鮮の役に於て大貝勒阿敏は和約の條件に關して他の凡ての大貝勒達と意見が對立して了つた。この特別に各旗の家老に當る大臣が和約に關する會議を開いたが、阿敏の本旗大臣顧三台、舒賽は獨り己が主阿敏の意見を持し、他の大臣又各自主の意見

を固持して相對立した様な事がある。異國物語にも滿洲人のこの主從關係を述べて「主人と家來は親と子の様に仕候。召仕候者をいたはり候事父の如くに仕候。又主をおもひ候事、親のごとくに仕候故、上下甚親く相見へ申候。大名の儀は不存候得共拾人二十人召使ひ候人之已下は皆其通りに御座候。下人何程召使候ても女房を持せ夫婦共に扶持仕り候」とのべて居る。之が清初の八旗を成立させて居た精神的紐帶である。従つて當時にあつては旗と旗との間の排他的傾向は覆ふべくもない。各旗の領主は各異母の出であり利害上も感情的にも融和は困難であるから主の意のある所下皆之に倣つたに違ひない。各旗の分離獨立の傾向は統制を缺けば缺く程濃厚になる筈である。太祖在世中でもこの旗の内部の勢力を無視し得なかつた様だ。太祖が獨裁政治を布く爲には弟シユルハチ長子褚英を退けたが、その子孫には矢張り旗を襲封させて居る。そして太祖はこの對立を緩和させるべく種々方策をとつて居た事が聞見録に見える。即ち褊將といふものを説明して「褊將所領。或三柳累。或五柳累。而貴盈哥之子爲紅歹是之褊將者。他皆類之。蓋參錯互換。以爲維繫之術也」^⑭とある。之によつて領主の子を互に入れかへて所謂維繫の術とした様である。それでこの對立を促す様な事を犯したものは嚴に處罰された。^⑮

而してこの旗の統制は太祖の在世中は父子即君臣で比較的圓滑に持續されたであらう。それに太祖の獨裁振りには強烈無比ものであつたらしく、この事を李民煥は「奴酋人となり猜疑威暴、其の妻子及び平素親愛の者と雖も少しく忤る所あらば即ち殺害す。是を以て人畏懼せざるなし」と記して居る。この様な強力を以てしても尙國家統一の建前から八旗の分裂を防ぐ爲には種々苦心しなければならなかつたのだ。二代目になるとさうはいかぬ。弟兄即君臣は一朝一夕に成り立たぬ。況や太祖の如き惡辣無比の統制力を缺いで居れば尙の事である。

太宗が即位以來兄弟貝勒を形式的にも實際的にもこの君臣の關係に還元する事に努力した事は顯著な事實であ

る。而してこの意圖を實現する爲に講じた方法は先づ八旗を事實上自己勢力下に置く事、並に政治組織としては君主權確立の具として支那の六部の制度を取入れた事にあるといへやう。以下項を追ふて述べやう。

三

太祖が崩ずると先づ考へられるべき事は太祖の麾下の二旗の所屬問題即ち八旗の編成の移動の問題である。太祖は之を如何に處置したか。今この事を明にする爲に之に關する史料を掲げて検討して見やう。

李朝實錄光海君日記に太祖の天命六年當時の八旗の分封表が見える。それを次に掲げやう。^⑬

其兵有八部……老酋領二部一部阿斗管將之。黃旗無畫。一部大舍將之。黃旗畫黃龍。貴盈哥領二部。一部甫乙舍將之。赤旗無畫。一部湯古台將之。赤旗畫青龍。洪太主領一部。洞口魚夫將之。白旗無畫。亡可退領一部。毛漢那里將之。青旗無畫。酋姪阿民太主領一部。其弟者送哈將之。青旗畫黑龍。酋孫斗斗阿古領其部。

羊古有將之。白旗畫黃龍。

とある。^⑭右の記事は朝鮮式の書き方で解り難いと思ふので清朝側の記載に従つて要點だけを次に掲げる。

正黃旗 鑲黃旗 太祖

正赤旗 鑲赤旗 代善

正白旗 皇太極(太宗)

鑲白旗 杜度(褚英の子)

正藍旗 莽古爾泰

鑲藍旗 阿敏

右の表は太祖の在世中のものであるが太宗の時は如何だろうか。朝鮮信使魏廷詰の瀋陽日記に天聰五年頃の分封表がある。それは次の様である。¹⁵⁾

1 岡山中軍
黃旗 汗

2 黃心紅邊旗 汗子好立汗弟壓多汗弟所晉多

3 紅旗 貴永介三子沙下羅四子王大五子勒晉阿六子麻處

4 紅心白邊旗 永介長子要土永介兄子豆頭豆頭弟利下

5 藍旗 亡可土平古亡可土子每隱月子沙沙麻

6 藍心紅邊旗 汗四寸弟之乙可自狀介

7 白心紅邊旗 阿之阿貴汗弟道立好

8 白旗 汗末弟道斗

之を清朝側の記載に當てれば

黃旗 太宗

鑲黃旗 豪格(太宗長子)、阿巴泰(太祖七子)

正紅旗 代善、薩哈廉(代善第三子)、瓦古達(第四子)、滿達海(第五子)、祐塞(第六子)

鑲紅旗 岳度(代善長子)、杜度(褚英長子)、尼堪(褚英第二子)

正藍旗 莽古爾泰

鑲藍旗 齊爾哈朗(阿敏弟舒爾哈赤第二子)

正白旗 多鐸(太祖末子大福金第三子)

鑲白旗 阿濟格(太祖第八子大福金長子)、多爾袞(太祖第九子)

となる。此の表と太祖在世中の表とを較べると結果は一目瞭然だ。移動のなかつたのはマングールタイの正藍旗と太祖の弟シユルハチの系統の鑲藍旗だけである。

先づ太祖の正黃鑲黃の二旗は太宗及びその長子の領する所となつて居る。汗を襲ふ事は即ち父の旗を繼承する事である事が分らう。次に目に立つのは褚英の遺子達が代善の支配下にある鑲紅旗の中に編入されて居る事である。褚英は八旗成立以前に死んで居るが太祖は長子の系統を認めて鑲白旗を統べさせたのであらう。而して太宗は褚英と代善が同母の兄弟である事に因縁をつけ以て代善の二旗領有に事實上制約を加へる意味で褚英の遺子を代善の二旗の中の一旗にはめこんだものと思へる。代善が大福金との一件以來脛に傷もつ身であつて見れば朕應はいはれなかつたに違ひない。これで代善の片腕はもがれた様なものである。そして太宗は曾つて自己の領有であつた正白旗には、太福金ウラナラ氏の末子多鐸を入れ褚白旗には同じく大福金の長子阿濟格・多爾袞を入れて居る。こゝに太宗の深慮遠謀の程が窺はれやう。ウラナラ氏のこの幼三子を旗の領主に封じたのは恐らくウラナラ氏の遺言に對する部衆の誓言を楯にとつて有無をいはさず祀りあげたに違ひない。そしてこの處置に對して他の諸子が誓言の手前不服を稱へる譯にはいかなないであらう。更に憶測を逞しうすれば三子の中末子を自己の正白旗に入れて居る事は、正白旗は元々自己の領有であつたから最年少のドドを表面に立て、おけば汗位に即いた後も完全にこの旗を自己の支配下に置き得る筈であると思つたのだとも取れる。鑲白旗は褚英の系統であつたからその既勢力に對抗すべく既に成長せる大福金の長子次子を封じて以て抑へとなしたものであらう。太祖大福金の遺

志といへば部衆も之を拒む事を得なかつたらし、又鎌白旗の岳度はもとく年少で太祖が後見して居たのであらうから比較的容易に代善の下に追ひ出し得たであらう。更に大福金の三子の方から見れば彼等は繼嗣に關して本來太宗とは反對の立場にあつたのだから太宗が即位すれば彼等の生存も危い筈である。それを太宗は生かして置いたばかりでなく、剩へ旗主に迄封じたのだから彼等は當然太宗の恩を着ねばなるまいし又事實着た様である。かくて太宗は一石で二鳥も三鳥も射込んだといはねばならぬ。そして八旗の中四旗は完全に太宗の配下にあり更に代善の一族は勢力を削減されて居る。こゝに於いて太宗は徐ろに發言權を獲得するに至つた様である。

四

次に太宗が企圖したのは八旗制度の内容の改變である。一言にしていへば中央集權的な政治組織を別に樹立し各旗に存する政治權力を削減するのが目的であつた。即ち幕府の設置である。當時の八旗は恐らく各旗獨立した封建的な制度であつたらうから、旗の領主の權限はその旗の事に關しては絶對的で他の容喙を許さなかつた様である。聞見錄に「凡有雜物收合之用。戰鬪力役之事。奴酋令於八將。八將令於所屬柳累。柳累將令於所屬軍卒。令出不少遲緩。絶無呈訴辯理爭曲之事云々」とあるによつて略理解出來やう。この八旗の統制は前にも言つた様にヌルハチ汗でこそ可能であつたので、彼なき後は矢張り制度そのもの機構を變へる以外に手はあるまい。そこで考へられる事は政治の分業である。行政事務の分擔を劃して領主達の權限の縮小化を計る事である。これに對する方策を如何にしたか。

太宗は即位と同時に各旗に總管大臣一人を置き旗務を總管させた。即ち行政専門家を設けた譯である。その權限は「八大臣凡議國政。與諸貝勒諸王共議之。出獵行師。各領本旗兵行。一切事務皆聽稽察」とあれば其旗の一切

の行政上の事務はこの大臣の掌握する所となる譯だ。更にこの大臣達は諸貝勒と比肩して國政を議する權利が與へられて居るがこの事は臣下の發言權を認める事につて即ち封建政治とは本質的に違つてくる事になる。そしてこれ等の大臣は汗に直屬する建前であるから勢ひ汗の發言權は増大され、旗のベイレ達の權限は縮小される譯である。之は中々の大改革といはねばならぬ。更に事務の分擔化の例を舉げると、左管大臣を二人各旗に設けて「贊理本旗事務。審斷詞訟。不令出兵駐防」とある。又調遣大臣を設置して「出兵駐防。以時調遣。所屬詞訟仍令審理」といふ事をさせた。この分擔化の結果は旗相互間に事務の連絡を緊密にする必要が起つて來、爲に旗の分裂の傾向を防ぎ、更にこの傾向を助長せば八旗全體を一丸として一つの統一的な組織に組込むことが出來やう。今かゝる官を設置する事によつて如何にして上の説明の如くになるかといふ事を八旗の當時の狀態の一々に當つて觀て見ると、大福金の三子の如き政治的無能力者が主となつて居る旗では一切の事務は總管大臣の手にあり、従つて汗と他旗との間に旗の領主を除いた直接の命令系統が樹立されてくる譯である。かういふ旗が発生してくると他の旗も自然それに制約されくる事になるではないか。そしてこの劃策の進捗する所は遂に大貝勒の國事辯理を罷免するといふ事實となつて現はれた。太宗實錄天聰三年正月の條に

因直月之故。一切機務輒煩。諸兄貝勒殊屬未便。可令以下諸貝勒。直月遇有機務。令諸貝勒管理。倘有跌失。可坐罪諸貝勒。

とあるのがそれである。即ち政務煩雜を楯にとつて並貝勒の登用を認めさせたのである。これは大貝勒の國政參與を拒むこととなり、間接にその政治權力を奪ふことになる。そして登用さるべき並貝勒は過失があれば刑罰に問はれるのであるから、その身分は豫め規定されて居り、同時にこの事は汗の任免權處罰權が認められたことを

意味し、汗の權限の擴充されたことを意味する。この様にして太宗は獨裁の地位を固めて行つたのである。八旗は本來發生の當初は不文律の慣習に基いて成立したのであるが、太宗の時に至つて漸く成文律に基く政治組織に變改されて來た。そして天聰五年に至つて以上の素地の下に所謂六部の制度が取入れられたのである。この六部の制は範を明の制度にとつて居る。明の制度は全く君主の獨裁政治を目標にして作られた制度であるから、この制度が太宗の手によつて樹立された事は取りも直さず彼の意圖した君主權が略々確立されたものと見てよい。この時期に至つて彼の地位は搖ぎなきものになつたのであらう。次の事實によつてこの事が一層明白に理解される。即ち天聰四年には大貝勒阿敏は罪を得て幽閉された。そして天聰五年には大貝勒及議政十貝勒八大臣に諭して君主の獨裁を宣して居り、特に大貝勒代善莽古爾泰に對しては、

兄等與衆定策。載吾爲君。聞國人或怨言。豈無所闕失而致怨乎。其所以然者必聞。審理刑獄以致怨。

と述べて間接に大貝勒阿敏の處分に對する衆人の批難に挑戦した。これに對し代善は「此非皇上一人之過。皆臣等用人之失」とて君主權の發動を是認し莽古爾泰以下諸貝勒は各自上奏して君主に對する忠誠を誓つて居る。

更に此の年十二月には再び鉞を振つて二三の過失を廉に莽古爾泰に對し大貝勒の禮遇を停止した。これで四頭政治の中の三巨頭を葬ることが出來た譯でこの時に於て三尊佛の制に則り自ら獨り南面して臣下の朝禮を受け以て君主の位を正した。かくて當初虛名に等しき汗位もこゝに至つて名實共に獨裁者たるの意味を獲

得する様になつた。彼の獨裁振りが強力となつて諸王が兢々として居た事を物語るものに次の様な記事がある。即ち天聰五年十一月瀋陽より歸還した朝鮮の回答使朴舊の上奏に「八王互相猜疑。豈得久安乎。臣之妄見必有殘之一事矣」と述べ、その理由を記して「一高山若差人於其處。則其餘七高山亦各送一人。以爲證參之地。我使之

人入去。八高山輪回供饋事必務勝此亦猜疑之致也」と云つて居るのがそれである。

そしてこの君主權確立に參劃したのは毎々いはれる所であるが投降漢人である。彼等の一人胡貢明の上奏文中に、⁽²⁾

皇上雖聰明天縱。治國之道不知遵法。先王每出己見。故事多猶豫有倣一頭去一頭。朝更夕改有始無終。且必狃着故習。賞不出之公家。罰必入之私室。有人必八家分養之。地土必八家分據之。卽一人尺土。貝勒不容於皇上。皇上亦不容貝勒。事々掣肘。雖有一汗之虛名。寔無異整黃旗一貝勒也。如此三分四陸。如此十羊九牧。總藉此強兵。進了山海。得了中原。臣謂不數年間必將錯亂不一而不能料理也。

と述べて汗の地位の有名無實と八旗制度の分裂の傾向を指摘し、一日も早く君主獨裁制を確立すべきを促して居る。これ等投降漢人の使噉は太宗の野心を煽動するに與つて力があつたらう。太宗の天聰十年に至り支那風に國號を清國と改め崇徳と建元した事は、之を内面的にいへば太宗が名實共に獨裁者としての地位を獲得したその記念とも見られるのである。

五

甚だ雜駁な論の立て方であるけれども、要するに清朝の中央集權的な君主獨裁制といふものは制度上から見るとこの太宗の時に確立されたと見てよい。そしてこの制度は太宗の卽位の時の情勢がこの制の實現を早からしめたものと見得る。

次に滿洲が支那の六部の制を取入れた事の意義を考へて見ねばならぬ。

元來この六部の制度は八旗制度の封建的な性質と全く相反するものであつて、太宗が滿洲固有の八旗制に對し

支那の生んだ六部の制度を取入れた事は要するに滿洲精神が支那精神に屈服した事である。國初の滿洲人はその剛毅果斷忠節に凝固つた武士氣質の所有者であつたが、こゝに至つて去勢されて支那文化の柔弱なる禮讀者になり果てた。滿洲旗人が無爲懶惰の裡に日を送り文學に耽る有様を見て、ヌルハチ汗も地下より慨嘆したに違ひない。これ等の事情の源は皆太宗の時代に發して居る。その颯爽たる若武者振りの故に、推されて武人の棟梁となつた所の太宗その人から逆に部衆の尙武の精神は刈り取られたのであつて、誠に皮肉な話といはねばならない。太宗以後の清朝の君主達は歴代國粹保存を叫び、國語を保存し、武藝を獎勵し、忠義の思想を鼓吹したのだが遂に何等見るべき結果を得なかつた。その根本の精神の涸渇せる所に何の國粹ぞやである。會つては滿洲の鐵騎至ると聞けば明の軍兵は草木の風に靡く如く敗走したものであるが、康熙年間の三藩の亂の時に至つては昔日の鐵騎は老骨吳三桂の漢軍至ると聞いただけで風を喰つて逃走した。こゝに異文化を採入れることの意義を見出し得やう。由來滿洲族は武力を以て支那を統一し支那本土に君臨したといはれる。それに違ひはないがそこには政治に於ける武力の價值を不當に強調した嫌ひがないではない。かの大國の永續したのには又別な事情が考へられる。支那の歴史の内で徵頭徹尾武力一本槍で支那に君臨し、その武力の衰退と共に退いたのは蒙古だけである。清朝は開國早々この武力は消滅して居た。それならば清朝が比較的平和に永續した理由の一半は要するに老大國の支那が安寧秩序を欲して居たからである。國家的に雄飛するといふ熱情を失つた此の國の國民は平和を齎すものでさへあれば誰が彼等の國を治めてもよかつたのである。從來、支那本土の平和を脅かすものは北方の異民族であつた。前代明朝を通じてその朝廷のなした大きな仕事といへば北方に對する軍備に狂奔した事だけである。この時以來支那人は防備の努力に飽き／＼して居た。その時北方人が彼等に安寧秩序を齎すべく支那本土へ乗り

こんで來たのだ。滿洲族が支那史上に占めるその歴史的意味はこの安寧秩序を支那に齎した點にある。そしてそれは名君主の治世といふ形であらはれて居る。清朝歴代の君主の名君振りは支那史上さうざらにある類のものではない。名君とは要するに聰明にして、政治する事にまじめな情熱を持ち得る人である。黎明既にかぎり火を點けて國政をとり、それが深更に及び、更にその後聖賢の書を翻いた君主といふものはさうざらにはない。況や前代の明朝では歴代天子のぐうたらな事これ又支那史上類がない程であつて見れば尙の事である。かくて支那はその患の基である北方の夷狄が中源に乗込んで來ることによつて北方への備はなくなり、然もこの人種は禍を漢人に及ぼす程の腕力は程々に失はれて居て平和に對する誠に忠實な番犬であつたのである。

註

- ① 太宗滿文老檔卷三十六崇德元年十一月の條。
- ② 内藤博士 清朝初期の繼嗣問題
- ③ 太祖滿文老檔 卷三癸丑年十二月の條。尙文中アルガツメンとあるは褚英の稱號である。
- ④ 右と同じ條に太祖は財産を兄に大半與へ弟達に少く與へて居る。これは家に於て長子の地位を重く見て居る一つの證據といへる。
- ⑤ 内藤博士は和碩貝勒が天命元年に設置された様に説いて居られるけれど、太宗實錄には太祖の辛酉年（天命六年）に設けられたとある。尙滿文太祖老檔にも天命六年に始めて *hošoi amin beile* としふ風に出てくる。
- ⑥ 滿文太祖老檔に *uju jergi hošoi ambasa beise*（一等和碩大臣貝勒）*jai jergi beile*（二等貝勒）*jušen nikan i uju jergi ambasa*（女真漢人の一等大臣）*jai jergi ambasa*（二等大臣）といふ順序で和碩貝勒は最高の官である。
- ⑦ 滿文太祖老檔には太宗皇太極の事を凡て *duci beile*（四番貝勒）で寫して居て他の呼稱は見當らない。太祖老檔は天聰の初年に出來たものであるから未だ制度に支那の模倣なく、從つて後繼者である太宗を皇太子と呼ばず四番貝勒と呼んだのであらう。この事はとりもなほさず四人の和碩貝勒は汗位を嗣ぐ資格ある者と一般の是認されて居た故ではあるまいか。
- ⑧ 滿文太祖老檔第五十四卷天命八年六月九日の條。
- ⑨ 太祖が大福金に殉死すべきを命じたといふ遺言はその眞偽の程は分らない。前後の事情から恐らくこれは太宗の指金によるものであつて實錄編纂の時にその様に著録したと考へられる。
- ⑩ 内藤博士清朝初期の繼嗣問題。
- ⑪ 太宗實錄卷。

⑫ 太宗實錄卷四天聰二年春正月。

⑬ 越前國新保村のものが漂流して今日の間島地方に上陸し後順治帝燕京に入るの時彼等も北京に赴いた。その時の見聞録を集めたもの。

⑭ この編將が八旗の制の何の官ははつきり分らない。柳累は *niu* の對音。朝鮮語にて *r* 音と *n* 音と相通ず。貴盈哥は代善 紅歹是は皇太極の對音。

⑮ 太祖老檔二十七卷天命六年九月十八日の條に、八旗の大將 *adun age* が阿敏貝勒莽古爾泰貝勒と皇太極との間を不和ならしめ國政を損つたと云ふ理由で拘引されたとある。

⑯ 光海君日記卷一六九 十三年九月の條。

⑰ 表の人名を滿洲名と對照せば次の如し。老酋は *nurgaci* 阿斗は *atun age*、大舍は *darhan hiya*、貴盈哥は *syuen batur* の對音 *daisan* の事、市 *N* 之舍は *borjin hiya*、湯古台は *tangudai* 洪太主は *hongtaiji* (太宗)、洞口魚夫は *donggo efu* 亡可退は *manggalai* 毛漢那里は *muhaiyan* 阿民太主は *amin taiji* 者達哈は *jingalang* 斗斗阿古は *dudu age* 羊古有は *yangsuri*

⑰ 1 汗は太宗。2 汗子好立 太宗の長子豪格 汗弟廕多是阿

巴泰 所音多是巴布泰(鮮語所は *b* 音を寫す)。3 貴盈哥は代善 三子沙下羅は薩哈廉 四子王太は瓦古達五子勃音阿は音不明なるも滿達海? 麻處は肅塞(肅に咎の訓ある麻字を當てた) 4 要土は代善の長子岳度、豆頭は褚英の長

子杜度、弟利下は尼堪(*r* 音 \parallel *n* 音)。5 亡可土は莽古爾泰平古は舒爾哈赤の子阿敏の弟篇古 隱日・沙沙麻は不明。

6 之乙可は阿敏の弟濟爾哈郎(四寸は鮮語從兄弟の義)、狀介は齊桑古。7 阿之阿貴は阿濟格 多立好は多爾袞。8 道斗は多譯。

尙陳仁錫の無園初集山海紀聞にもこの時の分封表があるが大體同じであるから略す。

⑱ 王先謙東華錄天命十一年九月丁丑の條

⑲ 八旗の凡ての用語は當時の狩獵の形式の用語を用ふ。

⑳ 清太宗實錄卷八天聰五年三月の條。

㉑ 李朝實錄仁祖實錄卷二十五。

㉒ 奏疏稿天聰七年の條。